



Title	The Rhetoric of Retelling Old Romances : Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris
Author(s)	関, 良子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57872">https://hdl.handle.net/11094/57872</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【2】

氏名	関 良 子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 23315 号
学位授与年月日	平成21年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	The Rhetoric of Retelling Old Romances : Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris (騎士道ロマンス再話にみる修辞法—アルフレッド・テニスン、ウィリアム・モリスの中世主義詩—)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之 准教授 片岡 悦久 准教授 石割 隆喜

## 論文内容の要旨

本論文は、イギリスの19世紀・ヴィクトリア朝時代の2人の詩人、アルフレッド・テニスン(1809-92)とウィリアム・モリス(1834-96)を取り上げ、この2人の詩人が、アーサー王伝説に代表される中世的世界をみずからの詩的世界の中に復興させるために、当時の敵対的な文学風土の中でいかに葛藤を経験しつつ、その中世的モチーフの再生と発展のための修辞法ないしは詩学を獲得したのかを明らかにしようとした研究である。論文は、序論、本論8篇、結論、および注、追加図版、参考文献から構成されており、全体で英文にて254ページ、和文400字詰め原稿用紙に換算して約700枚に相当する論文である。

「序論」では、テニスンの『国王牧歌』(1859-85)、モリスの『グィネヴィアの弁明、およびその他の詩』(1858)と『地上楽園』(1868-70)を考察対象に取り上げ、おおよそそのことを明らかにし、当時、中世主義に敵対するヴィクトリアニズムの詩論が優勢であった文学的・批評的状況の中で2人の詩人がいかにして中世的世界を表象するための詩的ヴィジョンを確立したかを解明するつもりであると、本論の目標を明らかにする。

本論は、三部構成になっており、第一部第1章「雑誌批評の時代における詩の機能」では、当時の詩人・批評家マシュー・アーノルドがヴィクトリア朝を「〈非〉詩的」な時代と呼んだ評言を中心にして、詩の不毛性を主張する言説をめぐる意味を雑誌文化の台頭というコンテキストの中で検討・考察する。

第二部は、テニスン『国王牧歌』を考察する。第2章『国王牧歌』初版における自分自身の声を有した女性たち』では、女性登場人物を中心とする描写が数多く見られる特徴に注目し、この詩が男性的気質を多分に含んだ中世騎士道物語を枠組みとしながらも、社会における女性の役割というヴィクトリア朝の同時代的テーマが扱われている面を評価する。

第3章「ダーウィニズムの陰に浮かぶ聖杯」では、「聖杯」伝説を描いた部分に宗教と科学の対立というダーウィニズムの陰が見られることを説く。第4章「牧歌というジャンル選択——『国王牧歌』におけるキャメロット再構築」では、中世詩人マロリーの『アーサー王の死』と比較しつつ、キャメロット伝説についての再話のありようを説明し、叙事詩ではなく牧歌によって再話を試みた本詩の特徴に注目し、この牧歌の無時間的空間こそ、中世騎士道ロマンスと同時代的テーマとを同時的・共存的に表象することを可能にする修辞法であったと主張する。

第三部は、モリスがアーサー王伝説にもとづく初期詩篇から、独自のロマンスの語りの世界を構築するに至る軌跡をたどる。第5章「〈ドラマティック〉性をめぐる議論とモリス——『グィネヴィアの弁明』」では、「劇的独白」という新技法を詩的世界に導入した意味を考察する。第6章「モリスの修行時代——アーサー王モチーフ詩の習作」では、モリスのアーサー王ロマンスをめぐる初期詩篇において従来指摘されていた不統一性について、テニスンとロバート・ブラウニングの2人の先輩詩人の影響下において独自の詩学を模索していた証であるとして意味づけを行う。第7章『地上楽園』におけるロマンス、あるいは過去の感覚』では、モリスの代表作が低評価を受けてきた理由を20世紀モダニストたちの批評を検証することにより解明し、社会と詩との関わりに対する詩人の問題意識を確認することにより再評価への道を提示する。

第8章「語り部としてのモリス——唯美主義運動における立場」においては、ウォルター・ペイター『ルネサンス』の「結論」が元来モリス『地上楽園』の書評であった事実を重視し、唯美主義者の「芸術のため芸術」の思想は、美の自律性を目的としたものだけでなく、むしろモリスの『地上楽園』に窺える生と死の意味を突き詰めて探る「生活のための芸術」に共鳴する部分が多いことを主張する。

「結論」においては、テニスンとモリスはアーサー王ロマンスと中世への憧れという共通の関心を出発点としながら、最終的には「古いロマンスを語り直す」ための修辞法においては相異なる地点に達したと主張し、テニソンは牧歌というジャンルを選択し、モリスは地上楽園という人工的な独自のロマンス世界を構築したのであると結論づける。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリスの19世紀・ヴィクトリア朝詩を代表する2人の詩人、アルフレッド・テニスンとウィリアム・モリスを対象にして、その詩作品の中から主にアーサー王伝説に代表される中世的世界を扱った作品を取り上げ、両詩人におけるこの中世志向のモチーフの根源的意味とその詩法・修辞法の確立の過程を解明しようとしたもので、その試みは極めて意欲的であり、英詩研究にとって大きな意味のある研究として高く評価されねばならない。特に、両詩人が中世的なるものに憧れを抱くありようを、『国王牧歌』『グィネヴィアの弁明』『地上楽園』などの代表的詩作品の具体的な分析を通して詳細に説き明か

し、その一方で、両詩人が辿り着いた境地の相違点——テニスの牧歌、モリスの人工楽園のロマンス物語——を明示することによって、ヴィクトリア朝英詩における重要な詩的モチーフであった「中世志向」を複合的な視点から考察することを可能にした点は、研究上の大きな貢献である。さらに、ヴィクトリア朝時代の詩人たちが共通に抱えていた芸術と現実社会に対する二つの姿勢、つまり芸術の社会的役割を強調する姿勢と芸術の自律性を求める姿勢についての重要な問題を、2人の詩人における中世的なるものの表象の異同によって分析・考察できる視角を拓いたことは注目すべき功績であると言えよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。テニスにおける叙事詩および牧歌のもつ意味についての理解は、やや一般論のレベルにとどまっており、先行研究を踏まえたより深い考察が求められよう。モリスにおける生活・死・芸術の絡み合いについても一層掘り下げた議論が望まれるであろう。また詩のパッセージへの詳細な分析がやや不足気味になる部分がいくらか残っているのも惜まれる。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。